

このたびの能登半島地震で、第1区・古田区長は国土交通省多治見砂防国道事務所の職員と同行し、被災地支援活動に取り組んでこられました。かつて多治見市消防本部職員として出向いた阪神淡路大震災や東日本大震災の被災現場での体験と重ね合わせながら、地域のつながりや助け合いの大切さを感じたということだと思います。平穏な日々の中、忘れてしまいがちな共助の仕組みを考え直す材料としていただければ幸いです。

被災地復興のつながりが大切

今回は運転手「一番壊れていた」

能登半島地震を受け、多治見市生田町の古田明久さん(65)は直後の3日から、土砂災害の被害調査のために派遣された国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所の職員の運転手として同行した。多治見市消防本部の元職員で、現役時代に阪神大震災や東日本大震災などの大地震、豪雨災害の現場に派遣された経験を持つ古田さん。今回の現場経験も踏まえ「地域のつながりが重要」と訴える。

元消防職員 多治見の古田さん

(吉田英悟)

古田さんが1995年の阪神大震災で現地に派遣されたのは地震から約1週間後。公園に寄った際、現地の人とみられる1人の男性からどこから来たのか尋ねられ「岐阜県多治見市だ」と答えた。すると男性は土下座し「ほんまに遠いところからありがとうな」とひと言。古田さんの頭の片隅にあった「助けてあげた」という上から目線の考えは消え、消防は命を守る最後のとりでであり、期待と信頼に応えなければならぬと自覚したという。

2011年の東日本大震災



地震の影響で起きた土砂崩れの現場。石川県輪島市門前町で(多治見砂防国道事務所提供)

災害でも約1週間後に福島県に入った。津波でも残った電柱の先端に子ども用の自転車がかかっていた。前には鮮明に覚えている。足元には写真が散らばり、目の前に広がる惨状からは考えられないほどの笑顔があった。古田さんは4人の隊員を引き連れる小隊長として乗り込んだが、涙を流しながらその写真を集め、砂を払い、風で飛ばされないよう置いた。ある若手隊員が、何もできなかったことを悔いると、自身が阪神大震災の時に感じた思いを伝えた。

今回の能登半島地震では過去2回と役割は異なるが、被災地復興という大きな目的は変わらなかった。「道路は今まで行った災害現場の中で一番壊れていた」と振り返る。停電で信号が消え、道路が寸断される中、石川県輪島市門前町内での急傾斜地の崖崩れの状況調査は予定通り回れず、拠点の金沢市まで戻るのも9時間を要した。

そのために「昭和のような地域のつながりを戻したい。外に出なくなつた高齢者が孤立しないよう、地域の人と顔を合わせる機会をつくらなければ」と意識を新たにしたいという。

同行した砂防職員が復旧に向けて作業する姿を見ながら「水道や電気が当たり前にあつた中、ライフライン復旧が一番の重要課題。決して後回しにできない」と痛感したという。被災した集落では、避難所に移らず自宅やビニールハウスにとどまる人たちの姿を目にし「地域のつながりがあるからこそ残れるのだらう」と感じたという。多治見市で地元区長を務める古田さん。「もし南海トラフで東京、名古屋、大阪などの大都市圏が壊滅的な状況になったら、多治見まで支援や人員が届かない可能性は十分に考えられる。その時に、ここにいる人たちがだけでも助け合えないといけない」と考える。

そのために「昭和のような地域のつながりを戻したい。外に出なくなつた高齢者が孤立しないよう、地域の人と顔を合わせる機会をつくらなければ」と意識を新たにしたいという。

3日朝、能登半島に向かう前に出発式に臨んだ古田さん(左から5人目)＝多治見市小田町の多治見砂防国道事務所で

